

「箱根八里」と漢詩

丹羽博之

要旨

鳥居忱作詞・瀧廉太郎作曲の「箱根八里」は、明治三十四（一九〇二）年三月刊の『中学唱歌』に於いて発表された。

一

箱根の山は天下の險 函谷関も物ならず

万丈の山千仞の谷 前に聳え後に支う

雲は山を廻り 霧は谷を閉ざす

昼猶暗き杉の並木 羊腸の小径は苔滑らか

一夫関に当るや 万夫も開くなし

天下に旅する剛毅の武士

大刀腰に足駄がけ 八里の岩根踏み鳴らす

斯くこそありしか 往時の武士

二

箱根の山は天下の阻 蜀の棧道数ならず

万丈の山千仞の谷 前に聳え後に支う

雲は山を廻り 霧は谷を閉ざす

昼猶暗き杉の並木 羊腸の小径は苔滑らか

一夫関に当るや 万夫も開くなし

山野に狩りする 剛毅の壮士

獵銃肩に草鞋がけ 八里の岩根踏み破る

斯くこそありけれ 近時の壮士

「箱根八里」の歌詞は、「函谷関も物ならず」「万丈の山」「千仞の谷」「一夫関に当るや万夫も開くなし」「蜀の棧道数ならず」等、いかにも明治うまれらしく漢詩漢文の影響を受けている。

ふとしたことから、『新修漢文 新制版 卷二』(昭和十二年七月印刷 昭和十六年八月修正印刷)を読んでいると、草場佩川(一七八八〜一八六七)の「山行示同志」詩に目が留まった。以下にその詩を挙げる。

路入羊腸滑石苔 路羊腸に入りて 石苔滑らかに

風従鞋底掃雲廻 風鞋底に従ひ 雲を掃ひて廻る

登山恰似書生業 山に登るは 恰かも書生の業に似たり

一歩歩高光景開 一歩歩高くして 光景開く

一読、起句は「箱根八里」とそっくりである。これは偶然の一致とは考えにくい。鳥居忱が箱根の険を表現するときに、草場の詩を利用したことはあきらかであろう。承句の「掃雲廻」「鞋底」は「箱根八里」の「雲は山を廻り」「獵銃肩に草鞋がけ」に似通う。当時は先行作品を上手に利用するのが常套手段。寧ろ、いかに先行作品を利用するかが作者の腕の見せ所であった。また、「箱根八里」の出だしの「箱根の山は天下の険」は白楽天の「夜入瞿唐峡」の冒頭「瞿唐天下険」を参考にしたものと考えられる。瞿唐峡の上流には、蜀の栈道がある。

草場の詩は、山行に託して、学問は上達するに従い物の見方が広くなることを同志に説いたものであり、教訓的・勸学の詩であり、旧制中学生が学ぶにはまことにふさわしい教材と言えよう。「箱根八里」も『中学唱歌』に発表されたということは、旧制中学の唱歌の時間に歌われていたのであろう。明治期の極めて優秀な旧制中学生は、この唱歌を歌いながら草場の詩を想起していたであろう。唱歌を歌いながら、草場の詩を頭に思い描き、学問の深さに憧れ、上級の学校に進み学問の奥深さを早く体験したいと思っていたのではないか。

キーワード：草場佩川、鳥居忱、瀧廉太郎、箱根八里

一、「箱根八里」と「山行示同志」

鳥居忱作詞・瀧廉太郎作曲の「箱根八里」は、明治三十四(一九〇一)年三月刊の『中学唱歌』に於いて発表された。

一

箱根の山は天下の険 函谷関も物ならず

万丈の山千仞の谷 前に聳え後に支う

雲は山を廻り 霧は谷を閉ざす

昼猶暗き杉の並木 羊腸の小径は苔滑らか

一夫関に当るや 万夫も開くなし

天下に旅する剛毅の武士

大刀腰に足駄がけ 八里の岩根踏み鳴らす

斯くこそありしか 往時の武士

二

箱根の山は天下の阻 蜀の栈道数ならず

万丈の山千仞の谷 前に聳え後に支う

雲は山を廻り 霧は谷を閉ざす

昼猶暗き杉の並木 羊腸の小径は苔滑らか

一夫関に当るや 万夫も開くなし

山野に狩りする 剛毅の壮士

獵銃肩に草鞋がけ 八里の岩根踏み破る

斯くこそありけれ 近時の壮士

「箱根八里」の歌詞は、「函谷関も物ならず」「万丈の山」「千仞の谷」「一夫関に当るや万夫も開くなし」「蜀の棧道数ならず」等、いかにも明治うまれらしく漢詩漢文の影響を受けている。

ふとしたことから、『新修漢文 新制版 卷二』（明治書院 昭和十二年七月印刷 昭和十六年八月修正印刷）を読んでいると、草場佩川（一七八八〜一八六七）の「山行示同志」詩に目が留まった。以下にその詩を挙げる。

路入羊腸滑石苔 路羊腸に入りて 石苔滑らかに

風従鞋底掃雲廻 風鞋底に従ひ 雲を掃ひて廻る

登山恰似書生業 山に登るは 恰かも書生の業に似たり

一步歩高光景開 一步歩高くして 光景開く

一読、起句は「箱根八里」と極めて類似するが、これは偶然の一致とは考えにくい。鳥居忱が箱根の険を表現するとき、草場の詩を利用したことはあきらかであろう。山行に託して、学問は上達するに従い物の見方が広くなることを同志に説いた詩であり、所謂「勸学」の詩である。詩吟も詠い、唱歌も歌うものであり、両者の共通性は明らかである。

道の細く曲がりくねった様、九十九折を「羊腸」と表現することは、他の漢籍にも見られる。例えば、王維の「燕子龕禪師」

山中燕子龕 山中の燕子龕

路劇羊腸悪 路は羊腸の悪よりも劇し

等ある。また、「苔滑」の例も散見する。しかし、「羊腸」と「苔滑」が結びつく例は、草場佩川の例以外は未見。承句の「掃雲廻」「鞋底」は「箱根八里」の「雲は山をめぐり」「獵銃肩に草鞋がけ」に似通う。現在では剽窃云々と取りざたされるかも知れないが、当時の作詞等の文芸活動は、先行作品を上手に利用するのが当たり前。寧ろ、いかに先行作品を利用するかが作者の腕の見せ所であった。この草場の作は『文久二十六家絶句』にも収録されている。降つて明治四十二年刊の『和漢名詩鈔』（文会堂書店 鈴木望氏御教示）にも収められており、草場の代表作として、広く人口に膾炙しており、現代の詩吟に於いてもこの詩はよく吟じられている。

また、「箱根八里」の出だしの「箱根の山は天下の険」は白楽天の「夜入瞿唐峡」の冒頭「瞿唐天下険」を参考にしたものと考えられる。白楽天の詩は

夜入瞿唐峡 夜瞿唐峡に入る

瞿唐天下険 瞿唐は 天下の険

夜上信難哉 夜上るは 信に難い哉

岸似双屏合 岸は 双屏の合するに似たり

天如匹帛開 天は 匹帛の開くが如し

(以下四句略)

というもの。瞿唐峡の上流には、蜀の栈道があり、「箱根八里」にも詠み込まれていることと無縁ではあるまい。

二、作者・背景紹介

次に、「山行示同志」の作者、草場佩川（一七八八～一八六七）の略歴を紹介する。

江戸時代、肥前（佐賀県）の人。（略）佐賀の多久邑主多久氏の家臣草場泰虎の子。文化三年（一八〇六）十八歳のとき佐賀藩校弘道館に入り、また長崎に赴いて華語を学んだ。二十三歳江戸に出て古賀精里の門に入って程朱の学を修めた。佐賀藩に仕えて弘道館教導となり、教授に進んだ。博学多識で詩文に長じ、また墨竹画を善くした。天明八年一月七日生、慶応三年十月二十九日没。年八十。著に佩川詩鈔四卷・佩川文鈔・佩川詠草・対礼余藻三卷・片烟遺灰（一名阿片紀事）四卷・片烟夢函一卷・烟茶独語一卷・附驥日録四卷・東路日記一卷・婆心帖一卷・山野一善一卷・湯豆腐一卷・毛儒（もず）の囀り二卷・来聘器械図一卷がある。（日本教育史資料卷十二 事実文編六十四 近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧）

（近藤春雄『日本漢文学大事典』明治書院）

次に、鳥居忱を『日本の唱歌（上）』（金田一春彦・安西愛子編 講談社文庫）により、紹介する。

鳥居忱（一八五四～一九一七）音楽教育家・作詞家。江戸に出生。明治三年大学南校に学び、また外国語学校に入り、さらに明治十三年衆に先立ち、音楽取調掛のメーソンについて洋楽を勉強し、十五年同掛を首席の成績で卒業し後直ちに同職員に採用され、十九年第一高等中学校の音楽の講師となり、二十四年音楽学校の教授に進み、ここで国語と音楽通論を教えた。大正初年までの間に同掛、文部省および音楽学校で出版した音楽図書で彼の手を経なかったものは一つもなかったと言っている。（以下略）

明治時代に活躍した人の多くは江戸時代末に生を享けて、人格形成期を送っており、漢文の素養があつた。乃木希典、山縣有朋、森鷗外等はその例である。当然鳥居もそうした教養のある人であり、「箱根八里」に「函谷関」のイメージを重ねた時から、漢詩文的世界を歌詞に取り入れることを思いついたのであろう。

この唱歌には、次のような逸話がある。

中学唱歌の編集が行われた時、応募して当選した作品。音楽学校教授鳥居枕から、この歌詞が作曲課題として提出されたとき、こんな曲を付けにくい歌詞とは、と先輩の作曲家一同尻ごみをした中で、まだ卒業したばかりの滝廉太郎が見事に曲をつけ、一同に舌を巻かせたという作品である。
〔日本の唱歌(上)〕金田一春彦・安西愛子編 講談社文庫

三、先行研究

一海知義『漢語の知識』(岩波書店)の「箱根の山は天下の険」には、次の解説がある。

・「歌詞には漢詩文の影響がはつきりと出ています。」

・「羊腸の小径」、羊の腸のようにまがりくねった小道、というのも中国の古典にもとづく、

とされ、「万丈の山、千仞の谷」は、唐の王之涣(688~742)の「涼州詞」の

黄河遠上白雲間 黄河遠く上る 白雲の間

一片孤城万仞山 一片の孤城 万仞の山

を挙げておられる。次に「一夫関に当るや 万夫も開くなし」は、李白の詩「蜀道難」に出てきます。として、

一夫当関 一夫関に当れば

万人莫開 万人も開く莫し

を挙げられる。そして

中国の詩人李白はまさか千二百年後の日本で、自分の詩がこういうふうに使われているとは思っていませんでした。しかし、スケールの大きなことが好きだった李白のことですから、「箱根八里」の歌をどこかの仙界で喜んで聞いているかもしれせん。

と結ばれる。

偶然、一海知義先生の「読游会」陸周年記念「読游会札記」（編集・発行 読游会 一九九九年五月）に、次のような拙文を書いたことがある。

大学入学時は、大学の先生というのは、私にとって雲の上の存在であり、はるかに仰ぎ見る高山であった。その私もオーバードクター六年の後、大学に就職したところから見方が少し変わってきた。曾てはあれほど高いと思っていた山も意外と低く見えることもあった。反対に登れば登るほどより高く見える数少ない山もあった。

二十年近くも前の文章であり、当然、当時は草場佩川を知らず、純粹に自己の登山の経験から書いたものであるが、二百年前に既に

同じ境地を漢詩に詠んだ日本人がいたことに感慨を禁じえない。

四、明治唱歌と漢詩文

明治時代に作られた唱歌・軍歌の中には、曲は西欧のものを利用し、歌詞は和漢の古典を下敷きにしたものが多い。更に「螢の光」「仰げば尊し」等は、歌詞に勸学・師弟愛を詠み込み、徳性の涵養を目的としている。

それまでの唱歌の多くは、外国の曲を元にしてしたが、「箱根八里」の曲は、瀧廉太郎による純粋な日本の歌曲であることに意義が認められる。しかし、その歌詞は中学生に歌わせることもあつてか、日露戦争前の「山雨来たらんと欲して風楼に満つ」の時代の風潮に沿うべく、質実剛健な歌詞になっている。この歌詞の背景に、草場佩川の漢詩を重ね合わせて理解すれば、当時のエリート中学生の格好の勸学の唱歌となる。唱歌と漢詩の両方から学問と音楽の楽しさを味わっていたと想像される。

* 本稿は、和漢比較文学会第九回海外特別例会(於台湾大学 二〇一六年九月一日)において、箱根八里「羊腸の小径は苔滑らか」と草場佩川「山行示同志」詩の「路人羊腸滑石苔」をめぐって、の題で研究発表したものを基にした。参加者から種々の御教示を得た。記して御礼申し上げます。